

「なんじ」と「われ」

さる五月八日、ガブリエル・マルセル博士を再び日本に迎えた。今回もフランス政府派遣の文化使節としてである。第一回の来日は、九年前の昭和三十二年であるが、朝日新聞に早大の安井源治氏が書いた紹介文で、マルセルの哲学の中心に「交わり」の思想があることを知ったのも、そのときである。

マルセルが大学を出てまもなく起こった第一次世界大戦のとき、かれは赤十字病院で行くえ不明になった人の消息を調べる仕事を担当したことがある。そういう人の氏名・出身地・年令・所属部隊などが、それぞれカードに書きこまれていた。が、それらの人たちの家族にとっては、カードは単なる文字の羅列ではなく、じつに切実な運命そのものであった。カードに見入る家族の嘆きを、毎日目撃したマルセルは、人間とは何か、ということを真剣に考えるようになったという。一心にカードに見入る姿をみているうちに、今まで「かれ」と「われ」との間柄であった家族と自分とのつながりが、「なんじ」と「われ」との関係に移るのである。この「出会いは、あらゆる人間関係のもっとも根源的なものであるが、これをかれは「交わり」と呼ぶ。人間と人

間との「交わり」は、相互に忠実であるかぎり存続するが、その忠実さが失われたとたん、「交わり」は消滅し、「なんじ」は再び「かれ」、つまり他人に帰ってゆく。

以上のことも、安井氏の文章に導かれて知ったように記憶する。

(昭和四十一年七月)